金澤教報

金沢教区 第56回 教区同朋大会

さる5月14日、金沢教区第56回「同朋大会」が開かれた。講師に一楽真氏（大谷大学第29代学長）をお招きして、「出遇いが開く世界」という講題でお話いただいた。

講演に先立ち、金沢教区会議長の坂本学氏が挨拶に立ち、「現在私たちが生きるこの世界には、悲しいことに戦争があり、まさに五濁悪世の様相を見せています。その中で私たちは何を依り所として生きればよいのか、仏様の教えに聞いていきたい」と述べた。

講師の一楽真先生は、大谷大学で「真宗学」を担当され、今年大学を定年退職された。講演では、大学における授業などを振り返られ、念仏の教えに出遇うことはどういうことなのか。自分自身の具体的なエピソードも交えながら、約210人の聴衆1人ひとりに、やさしく語りかけられた。

一楽真氏による法話

先生は、親鸞聖人の生涯を「出遇いの連続であった」として、「聖徳太子、法然上人、そして釈尊との出遇い直し、これらの出遇いによって、親鸞聖人の人生は大きく開かれていきました」と述べられた。

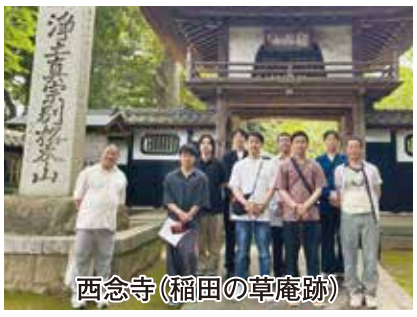
一方、私たちも同じ念仏に出遇いながら、依然としてはっきりしないのはなぜなのか。その理由について、「私たちも多くの人との出遇いによって生かされています。しかし普段はそのことを意識せず、自分1人の力で生きているように思い込み、自分の考え方や価値観だけを頼りに歩んでしまいます」と述べられ、自分自身が気づいていない問題点を問い直すことが大事であると教えられた。

桐山信英（第六組 周光寺）

金沢教区教学研修室 第13期 研修旅行

第13期金沢教区教学研究室研修旅行では常陸国稲田（茨城県）へ2泊3日の日程にて、親鸞聖人の旧跡巡りを行ってきました。当時親鸞聖人が北陸越後を離れて訪れたのが常陸国であり、稲田の草庵を拠点として関東で布教を行われました。

今回の研修旅行ではその「西念寺」（稲田の草庵跡）や聖人の伝承が伝えられている「大覚寺」「枕石寺」、『教行信証』執筆のため豊富に所蔵されていた文献を目的に親鸞聖人がたびたび訪れていた「鹿島神宮」などを巡り、親鸞聖人の軌跡を訪ねました。


西念寺（稲田の草庵跡）

それぞれの寺院では寺族の方から「稲田の草庵から鹿島神宮まで親鸞聖人は陸路だけではなく船も使い、通っていたのではないか」といったようなお話を聞かせていただくことができました。

お話を聞いたり、旧跡を見たりする中で関東地域における親鸞聖人による教化の歴史を感じることができ、大変勉強になりました。私はこの度の研修旅行ではなかなか訪れる機会のない常陸国をじっくりと観てまわることができ、よい経験をさせていただいたと感じております。

また普段と異なる地での研修は教学的なことだけではなく、教学研究室のメンバーとの交流を通じて人間的な面でも刺激を受け、様々なことを学ばせていただけました。関東地に赴いて見聞きしてみることは、北陸の地にいるだけでは感じることのできないことを感じ、自分自身の宗教観が開いたように思いました。

月輪直樹（第四上組 願念寺）

青少幼年教化指針に学ぶ 研修会in能登教区

今回の研修会に金沢教区から9名参加した。青少幼年センター主幹からの挨拶・趣旨説明の後、絵本を使ったアイスブレイクがあり、その後、青少幼年センターから発刊されている『青少幼年教化指針』を元に2人の講師から講義、その後スタッフ参加者で座談会が行われた。

講義では実際に冊子を手にしながら発刊に関わったスタッフの2名の方から「基本姿勢」「あゆみ」「課題と提言」という項目について、小さい人たちと関わる中で経験されてきた事柄なども踏まえてお話をして下さった。私自身が幼い頃から子ども会の参加者として参加してきた時に関わって下さったスタッフの方からのお話ということもあり、どのような思いを持って関わって下さっていたのかを聞き、懐かしさや当時の思い出が蘇り、感慨深い思いがあった。

教化指針の中に「青少幼年教化の主体者は、青少幼年その人です」という言葉が出てくるが、その言葉にふれて、幼い頃寄り添ってくださった方々のお顔が浮かぶと共に、自分自身が今、スタッフとして小さい人たちと関わる際に、どのような関わりが出来ているかを振り返ることが出来た。今でも子ども会の場に出ると、幼かった頃の自分の気持ちを思い出し、大切に接してくださった大人の顔が浮かんで来るが、私自身がその大人のようになっているかということを常に感じている。また、青少幼年教化が大切だと思いながらも、自坊ではなかなか子ども会を開くことを出来ていないということも私自身の課題である。その課題を座談の中で話すことが出来、参加者のかたのそれぞれの環境の中での歩みを聞くことが出来たことで、今の私に出来ることを考えながら小さい人たちと関わり続ける事の大切さを再確認できた。今回の研修を受けて感じた思いを私自身の中でどのようにカタチに出来るか、悩みながら歩んでいきたいと思う。

研修会での講義

森田恵利（第八組 本覺寺）